

報告 メキシコのネオ・インディヘニスモ

小林 致 広 (神戸市外国語大学)

I はじめに

インディヘニスタであるためには、インディオあるいは原住民について語るだけでは不十分である。インディヘニスモ論争とは、インディオという「他者」の、自分たちの「国のモデル」(el modelo del país)への位置づけをめぐるイデオロギー論争にほかならない。論争においてインディオは論争の対象ではあったが、その参加者となることはなかった。ヨーロッパ人の侵略・植民とともに生まれたインディオという「他者」の存在は、同時にインディヘニスモ誕生を意味している⁽¹⁾。

メキシコのインディヘニスモの歴史において、インディオという「他者」は、植民地期においては「隔離」(segregación)、独立・改革期には「同化」(asimilación)・「併合」(incorporación)という政策により多大の圧迫を受け続けた⁽²⁾。そして革命の制度化にともない「統合」(integración)という新しい言葉が、インディヘニスモの最終目標を飾るものとして掲げられた。その最終目標とは、メキシコという国民国家における「他者」=インディオの消滅にほかならない⁽³⁾。

1948年に全国原住民庁(INI)として制度化された官製インディヘニスモは、資本主義的發展と国内市場拡大のため、アナクロニックな文化・習慣に固執している「遅れた」インディオを、プログラムされた文化変容によって国民生活に統合するという路線を明確にうち出していた⁽⁴⁾。1948年のINI創設からその死の日(1970年11月30日)までINI長官の任にあったアルフォンソ・カソ(Alfonso Caso)は、1956年のストックホルムでのアメリカニスト会議などの場で、メキシコの原住民問題は20年以内に解決するであろうという楽観的展望を繰り返してきた⁽⁵⁾。

この「文化的に同質な国民国家」=「メスチソ国家」の形成を大目標としてきた「統合・開発主義的インディヘニスモ」(indigenismo integrador-desarrollani-

第1表 センター活動の比較対照

	1951—1976年	1977—1978年
国家モデル 問題点	文化的に均質な国家 原住民の文化的・技術的後進性	民族的多元主義の国家 原住民のおかれている社会的・経済的収奪の状況
活動タイプ 教育 センター立地 活動調整	低開発地域へ開発を導入 スペイン語化 原住民居住域の中心都市 センター審議会	民族集団の発展の援助 二重文化・二重言語 原住民市場のある町 社会経済開発促進委員会 COPLAMAR
活動の特長	資本主義的開発と国内市場の拡大 ・農業の近代化 ・国民社会への統合 ・文化変容	発展の他の途を模索 民族集団の能力を信頼 ・参加 ・多元主義 ・自主管理

出典 Félix Báez-Jorge “Aculturación e integración intercultural: un momento histórico del indigenismo mexicano, en *INI*, 30 años después, p. 293.

sta)に対する批判は、1968年の「危機」を契機に、さまざまな方面で展開していった。1970年代のエチェベリア(1970年12月—1976年11月)、ロペス・ポルティエヨ(1976年12月～1982年11月)の2政権も、旧来のインディヘニスモ政策にいくつかの軌道修正をほどこしてきた。ロペス・ポルティエヨ期にINIの社会人類学副局長をつとめたフェリクス・バエス・ホルヘ(Félix Báez-Jorge)は、前政権までのINIの原住民統合調整センター(centro coordinador indigenista, 以下センターと略)の活動方針と、1977—82年の活動方針を比較して、第1表のような対照表を提示している⁽⁶⁾。この表を字義通りに受けいれることは誤解をまねくであろうが、新しい「国のモデル」が提示されていることは否定できない。

すなわち、メキシコが多言語・多民族集団からなる国である現状を是認し、各民族集団の自主管理(*autogestión*)⁽⁷⁾という政治面での民族的複権を謳い、「多元主義的・参加のインディヘニスモ」(*indigenismo pluralista y de participación*)がとなえられている⁽⁸⁾。また、インディオに関する定義も文化的なものから、社会的・経済的なものにかわり、インディヘニスタの役割も国家のプ

プログラムの促進者から、抑圧されてきた民族集団のための奉仕者と位置づけられるようになった⁽⁹⁾。この新しい装いをした官製インディヘニスモ、すなわちネオ・インディヘニスモは、ひとつのコンセンサスとして形成されたものではなく、諸々のセクターの利害関係の矛盾を反映したものにほかならない。

以下、Ⅱ章では、1970年代のインディヘニスモ政策・活動を概観し、Ⅲ章では1970年代の軌道修正の背景となった1960年代末から1970年代初頭にかけての、官製インディヘニスモへの批判の展開を紹介し、さらに官製インディヘニスモの批判者たちと、その擁護者、とりわけエチェベリア期のINI長官ゴンサロ・アギレ・ベルトラン(Gonzalo Aguirre Beltrán)との間で展開されたスコラの論争を整理する。Ⅳ章では、インディヘニスモに関与してきた人類学者・社会学者、宗教関係者およびいくつかの政党の対応を概観し、くわえて原住民集団の運動動向について紹介する。メキシコのネオ・インディヘニスモの特性のひとつは、議論の対象でしかなかった原住民が、論争の場に介入しはじめたことであり、これをいかに操作・制御するかが、今後のインディヘニスモの課題として認識されているであろうことは容易に推測しうる。

Ⅱ 1970年代のインディヘニスモ政策・活動

アルフォンソ・カソは死の20日前の1970年11月10日の会見において、メキシコのインディヘニスモ活動の不備な点は、批判者たちのいう政策方針の不備ではなく、財政的なものであるとのべている。そして、次期大統領が十分な財政基盤をあたえてくれるなら、25年以内に原住民問題を解決できるとさえ断言している⁽¹⁰⁾。1970年代の2政権のインディヘニスモ政策は、このカソの提言には一応答えているといえよう。

1 インディヘニスモ活動基盤の拡充強化

第2表は、INI設立30周年に出版された記念刊行物に所収された、1949～1979年のINI関係予算、センター数の増加を示した資料である。この資料には本予算しか示されていないが、それでもエチェベリア期のINI予算の増加率は、6年間で約800%であり、年平均に換算すると約140%である⁽¹¹⁾。ロペス・ポルティエーヨ期は、全般的な緊縮政策の影響を受け、若干の頭うち傾向に

第2表 INI 予算、センター数の変化

年 度	INI 予算 (万ペソ)	上昇率 (%)	活動事務所数 ()内はセンター
1949	50		1 (0)
1960	1,396		9 (8)
1969	1,850	132	13 (12)
1970	2,732	148	13 (12)
1975	22,010	806	64 (65)
1976	31,711	143	73 (70)
1977	42,235	133	82 (81)
1978	58,209	138	89
1979	85,170	146	114

出典 INI, 30 años después

設置されたことになる。この傾向は、1977年以降も続いているといえよう。しかしその増加は予算の増加に対応したのではなくテワンテペク地峡部統合開発委員会(la Comisión para el Desarrollo Integral del Istmo de Tehuantepec)、セリ族統合開発委員会(la Comisión para el Desarrollo Integral de la Tribu Seri)やウィコト計画(Plan Huicot)など既存の INI 関連諸機関の廃止によってういた資金によるものであるという指摘がなされている⁽¹³⁾。現時点においては、センターは原住民居住域の大部分に分布しているといえよう。このセンター数の増加に、質的・機能的充実がともなっていなかったことはいうまでもない。

一方、INI の基幹事業である教育文化事業に従事する人員の増大も顕著である。すなわち、1970年代において推進されはじめた二重言語・文化教育に対応した原住民二重言語教員(maestro bilingüe)・文化促進員(promotor cultural)の養成である。この養成は、INI と公教育省内に新設された原住民居住域学外教育総局(Dirección General de Educación Extraescolar en el Medio Indígena、以下 DGEEMI と略)の管轄下でおこなわれた。教員は原住民教育の1年コースを履修した師範学校卒業者、文化促進員は中等教育(場合によっては初等教育)修了者で、1年間の訓練と教員のもとでの3年間の実習をおこなったものが、その資格を取得できた。この原住民二重言語専門職(profesionales indígenas

あると考える。エチェベリア期の6年間の INI の本予算や臨時予算の内訳を検討するかぎりでは、INI の中心的活動は、教育文化事業にあると思われる⁽¹²⁾。

こうした予算面の拡充を反映しているのがセンターの数の急増という特異な現象であろう。1970年までに設置されたセンター数は、12にすぎなかったが、1976年末までには70に達している。いわば、それまでの20年間で設置されたセンター数に匹敵するものが、1年単位で

bilingües)の1970年代の増加は、第3表に示したとおりであり⁽¹⁴⁾、1979年度には約2万人に達したという⁽¹⁵⁾。

INIの活動やメキシコの原住民に関する研究などの広報事業も、1970年代に顕著となる。1960年代から刊行され1970年までには、わずか8点しかなかった社会人類学叢書は、1976年には52点に急増する。1977年からは「メヒコ・インディヘナ」

(México Indígena)という広報誌が創刊され、あらたにメキシコ人類学古典、社会調査、原住民族集団モノグラフなどの叢書が企画出版されている。これらは、いわば専門家むけであるが、エチェベリア期は公教育省から出版された廉価で一般むけの叢書 Sep-Setentas 約300冊のなかにも、インディヘニスモ関係の評論や民族調査モノグラフが数多く含まれている。

2 インディヘニスモ活動方針の修正

エチェベリアのインディヘニスモ政策改革は、財政基盤の充実とともに、関係機関の相互調整という機構改革を含んでいた。その代表的なものがINIと公教育省の連繫強化である。これは、INI長官アギレ・ベルトランの公教育省民衆文化学外教育次官(Subsecretario de la Cultura Popular y Educación Extraescolar)兼任によって体现された⁽¹⁶⁾。メキシコで最初に設立されたチアパス州サンクリストバル・デ・ラスカサスのセンターの初代所長をつとめたかれは、その体験をふまえて定式化した地域的統合(integración regional)戦略⁽¹⁷⁾を全国的レベルで実践にうつそうとした。

そのためには、人類学者・社会学者を地域の統合的開発計画などに参画させる必要があった。官製インディヘニスモに対する批判勢力の本拠であった国立人類学歴史学学校(ENAH)内に、インディヘニスモ関係の講座を開設する企ては頓坐したものの、ベラクルス大学などに類似の講座が開設され、批判者の一部もそれらの機関に登用されていった。またサンクリストバルには、より実際

第3表 二重言語専門職の増加

年 度	教 員	文化促進員	計
1970—71	1,730	1,921	3,651
71—72	1,606	2,219	3,825
72—73	1,829	3,669	5,498
73—74	2,681	3,403	6,089
74—75	3,728	3,280	7,008
75—76	—	—	12,057
77—78	6,029	8,001	14,030

出典：松久玲子「メキシコにおける二重言語・文化教育の動向」

的なインディヘニスタ養成機関として「地域開発学校」(Escuela de Desarrollo Regional)が開設された。この学校は学術副局と開発副局があり、前者では促進員学校、原住民技術習得寄宿校、専門家養成コース、人類学学校からなり、原住民社会と国民社会の出身者を国家の開発政策の媒介者として、養成することが目的とされた⁽¹⁸⁾。この学校の運営を担ったメルセデス・オリベラ(Mercedes Olivera)は、批判的人類学者として革新的なプログラムを実施に移したが、アギレ・ベルトランはその計画が非国民的と非難し彼女を短期間で更送した⁽¹⁹⁾。この例が示すように、エチェベリアの「民主主義開花期」における人類学者・社会学者の大量動員は、官製機関の機能停滞をもたらす結果となった。そのため、エチェベリア政権の後期においては、経済危機状況における階級間協調路線への未組織セクター＝原住民族集団動員のための開発計画をはじめとする官製活動のイデオロギー的基礎づくりのために、人類学者・社会学者を選択的に動員するという方針に転換されていく⁽²⁰⁾。

全国原住民会議(Congreso Nacional de Pueblos Indígenas)の組織化は、1971年9月のINI特別審議会において既に示唆されていたが、1975年10月にその第1回会議がバックアロで開催された。1975年3月から8月にかけて、INI、全国農民連合、農地改革省など官製機関の手で組織化された60あまりの地方会議がひらかれた⁽²¹⁾。バックアロの全国会議では、全国原住民審議会(Consejo Nacional de Pueblos Indígenas, CNPI)の制度化が決定された⁽²²⁾。1977年2月にメヒコ州のサンタナ・ニチュで第2回全国原住民会議が開催されるが、それはロペス・ポルティェーヨ政権の「行政改革」に対応した新しいインディヘニスタ政策が、原住民集団の総意による要請にもとづいたものであることを演出する儀式として設定されていた。

INIの新長官として就任したイグナシオ・オバイエ(Ignacio Ovalle Fernández)は、新政権が発足させた「被抑圧地域・周縁住民集団のための全国計画総合調整委員会」(Coordinación General del Plan Nacional de Zonas Deprimidas y Grupos Marginados, 以下COPLAMAR)の委員長に指名されていた。COPLAMARはインディヘニスタ関連諸機関が個別に実施していた地域開発計画や諸活動を調整し経費の効率的運用を促進させるために設置されたものである⁽²³⁾。前記の第2回全国原住民会議で提起された、原住民の社会経済開発全国

委員会(Comisión Nacional para el Desarrollo Social y Económico de los Pueblos Indígenas)の設置や各原住民居住域への原住民開発センター(Centros de Desarrollo Indígena)の配備要請は、ロベス・ポルティエヨ政権の提唱した「生産のための同盟」(Alianza de la Producción)への参加表明であった⁽²⁴⁾。この要請を受け、COPLAMARは1978年度以降、1年に20程の地域統合計画を原住民集団のために実施していく旨を表明している⁽²⁵⁾。

原住民や人類学者などの官製インディヘニスモへの参加動員の見返りとして、政府はもっぱら教育文化面での一定程度の前向きな姿勢を示してきている。それは原住民文化・言語の再評価・復権を謳う「二重言語・文化教育」政策という方針に反映している。1977年に公教育省内に新設された民衆文化総局(Dirección General de Culturas Populares)による二重言語職者の原住民文化修得計画(Capacitación de Técnicos Bilingües en Cultura Indígena)の1977年からの各センターでの実施⁽²⁶⁾、公教育省・INI・国立人類学歴史学研究所高等研究センター(CIS・INAH)の3者による民族言語学専門家養成計画(Programa de Formación Profesional de Etnolingüistas)の1979年7月からの実施⁽²⁷⁾、あるいはこれと対応する公教育省の夏期言語研究所(Instituto Lingüístico de Verano, ILV)との協定破棄通告などは⁽²⁸⁾、CNPIや人類学者たちの要求に掲げられていた項目であった。

ロベス・ポルティエヨ期のこうした政策は、少数民族集団の復権運動を操作し、かれらを制度的に取りこんでいくためのより洗練された方法にはかならないとする批判は⁽²⁹⁾、教育文化部門における活動の実態や、他の諸部門の政策・活動を検討すれば、けっして的是はずれなものとはいえないであろう。

Ⅲ 伝統的インディヘニスモへの批判の展開

1968年の「危機」に噴出した官製インディヘニスモに対する批判は、政策・活動への直接的論難だけでなく、メキシコ人類学そのものへの批判を内包していた。その批判は60年代後半に、主として「第3世界」を現場とする人類学者や社会学者のあいだで展開していった植民地(帝国)主義的人類学への批判と、それにかわる「解放」のための社会科学の提起という動向とも連動していた⁽³⁰⁾。1968年の“Current Anthropology”誌上での「社会的責任」シンポジウム⁽³¹⁾、

1969年メキシコ市で開催されたラテンアメリカ社会学会⁽³²⁾、1971年の第1回バルバドス宣言⁽³³⁾、1969年(メキシコ市)、1971年(マイアミ)の応用人類学総会⁽³⁴⁾などに、メキシコの人類学者・社会学者たちは積極的に参加し、「コミットした社会学者」(committed social scientist)のあるべき姿を模索していった。

1 批判的人類学の提起

原住民問題を文化の問題と片づけてきた官製インディヘニスモに対する批判は、原住民問題を社会・経済的な枠組のなかでとらえようとした人々により、1960年代の中期頃から始まった。その理論的支柱となったのは、パブロ・ゴンサレス・カサノバ(Pablo González Casanova)やスタベンハーゲンの提唱した「国内植民地論」(colonialismo interno)であり、さらにはフランクの新従属理論であった。

1968年の学生運動には、ENAHの教員・学生の一部も参加し、官製インディヘニスモの設定する問題領域にのみ人類学の関心領域を狭ばめてきたメキシコ人類学への批判が展開していった⁽³⁵⁾。そこでは、インディオはすでに一定の不利な条件で、経済体制に統合されており、国内でもっとも搾取されているセクターであるという現状把握が共有されていた。1970年7月には、ENAHの教員で学生側にたっていたグループの5人が、*De eso que llaman Antropología Mexicana* という論集を刊行し、「現状維持」を主張することで利益を享受しようとする人々に人類学が奉仕してきたことを批判的に総括しようとした⁽³⁶⁾。

この論集の序論部にあたる挑発的な論文で、アルトゥロ・ワルマン(Arturo Warman)は、メキシコ人類学の理論的脆弱性・折衷主義・詭弁主義の原因は、独自の研究対象をもちえない人類学が、そのテーマをインディヘニスモに限定し、官僚制度に組みこまれていったことにあるとし、革命期のガミオらの仕事を含め人類学は一貫して植民地主義に奉仕してきたと断罪している⁽³⁷⁾。ギジェルモ・ボンフィル(Guillermo Bonfil Batalla)は、革命期以降のインディヘニスモが、「国民社会」の名により原住民集団に非対称的な抑圧・従属・収奪関係を押しつけてきたことを指摘し、それに代る途として、メキシコが複数文化(民族集団)の国であるという現実認識に則した民族集団の自決権の保障を提起している⁽³⁸⁾。マルガリタ・ノラスコ(Margarita Nolasco)は、1969年にオアハカ

州に設立された社会調査統合研究所(Instituto de Investigación e Integración Social del Estado de Oaxaca, IIISEO)⁽³⁹⁾での活動を踏まえ、真面目なインディヘニスタの活動を阻害してきた政策や応用人類学のあり方を批判している⁽⁴⁰⁾。以上の3篇の論文に続き、メルセデス・オリベラは調査研究体制のあり方⁽⁴¹⁾、エンリケ・パレンシア(Enrique Valencia)は人類学教育のあり方を、メキシコ人類学の母胎である ENAH の現況分析を手掛かりに論じている⁽⁴²⁾。

インディオを資本主義システムに統合しようとするブルジョア的人类学を否認する点においては共通の認識を有するものの、各論者の立場は、その後の活動・実践において分岐を示したことから推察されるように、必ずしも同質的なものではなかった。また、官製インディヘニスモに代る具体的な対案を実践プログラムとして提示するものでもなかったが、深刻な社会変化の過程に人類学を関与させていこうという点においては、大きな貢献をしたといえよう。とりわけ、ボンフィルの提示した社会的・文化的現実に対する批判的視点の必要性と、多元主義的国家像と民族的自決(*autodeterminación*)という着想は、70年代の論争において常に参照されるものとなった。

「68年代」の批判活動は、古参の人類学者、インディヘニスタの一部の活性化をもたらした。多系的発展論者であるアンヘル・パレルム(Ángel Palerm Vich)は、1970年1月に主催した「メキシコのインディヘニスモ」討論会で、ベルトランと討論し、官製インディヘニスモの単系的発展史観を批判した。かれは、文化的多様性を内包した国家モデルの必要性を唱くとともに、「開かれた社会」であるメキシコにおいて、フランク流の「解放の人類学」は一義的に適用できないことを強調した⁽⁴³⁾。一方、カルデナス期の農村教師であり、1940年代以降チアパス高地、パパロアパン流域で様々な調査活動を続けてきた古参のインディヘニスタであるポサス夫妻(Ricardo Pozas Arciniega y Isabel Horcasitas de Pozas)は、1971年の著作で、原住民問題を社会階級関係全体のなかで把握する必要性を指摘した。機能主義あるいは文化主義的視点を批判するとともに、国内植民地論あるいは二重社会論および少数民族論の不十分を指摘し、資本主義体制下での原住民の脱部族化(*destribalización*)、セミプロレタリア化に対して、プロレタリア化の道を選択すべきことを表明した⁽⁴⁴⁾。この著作は俗流唯物論的な色合いが強く、概念や分析の不十分性は否定できないものの、

インディヘニスモ論争の場にマルクス主義的な方法論を再導入させた点は評価しうる。

官製インディヘニスモに無批判に動員されてきた人類学者、社会科学者の姿勢についての自己批判のなかから、新しい選択の道として、批判的(critica)・根源的(radical)・社会参加的(comprometida)な社会科学の必要性が唱えられた。1970年の応用人類学会でのスタベンハーゲンによる活動家的観察(activist observation)という方法論の提起は、68年以降のメキシコの社会科学者たちの議論の総括といえよう⁽⁴⁵⁾。

2 批判の分岐と議論のスコラ化

1971年9月のINI特別審議会は、「新カルデナス主義」を装う新政権が、革新的インディヘニスモ政策を演出する場として設定された⁽⁴⁶⁾。UNAM総長になったゴンサレス・カサノバやガルシア・カントウ(Gastón García Cantú)ら「進歩的・民主的・反帝国主義的小ブル」からの改良主義的批判と、INI、全国農民連合、農畜産省などのインディヘニスモ関係の官製諸機関の責任者たちによる「官僚的・技術論的弁明」を背景に、カルデナスの新しい化身としてのエチェベリアの新政策実施の表明がなされた。この審議会の演劇性を高めたのが、『メキシコのインディオたち』を執筆していた作家フェルナンド・ベニテス(Fernando Benítez)である⁽⁴⁷⁾。かれは、メキシコ革命の理念的支柱である憲法27条の精神を唾棄してきた大土地所有者、政治屋、国内・国外資本による抑圧・搾作に苦しむ原住民の窮状を、晩年のカルデナスに因むエピソードをからめながら雄弁に物語った。そして、インディヘニスモ政策の失敗は、革命の理念を忘却してきた歴代政権の政治的、財政的援助の不十分性と、関連諸機関の権能の分散・重複による非効率性であるとの指摘は、そのまま大統領の答弁のなかに組み込まれていく。

新政権の提唱するインディヘニスモの正統性を擁護する任務は、INI長官ベルトランに委ねられる。かれは、*América Indígena* 誌や Sep-Setentas 叢書などを駆使しながら、諸々の批判に対する選択的な批判を展開していく。70年代初頭のインディヘニスモに対する評価は、アルフォンソ・カソやファン・コマス(Juan Comas Campo)などを除けば、失敗ということでは一致していたが、

その原因をめぐって様々の意見が提出されていた⁽⁴⁸⁾。歴代政権の原住民問題に対する対応の一貫性の不在、官僚化にともなう政策実施能力の低下といった指摘は、ベルトランの反論の対象とはならなかった。同様に、カサノバ、スタベンハーゲンなど国内植民地に立脚した民族主義的、社会主義論調に対しても、正面きっての反論を回避してきた。むしろ、その議論を我田引水し、官製インディヘニスモの正統性を強化しようとした。

ベルトランの反論は、68年以降に抬頭してきた「アナーキスト」的諸潮流に対して向けられた。彼の反論は、これらの潮流が基本的なインディヘニスモ文献に無知であり、諸理論を誤解しているという点に集中していた。その反論のなかで、彼が定式化したのが、前近代的・植民地的遺制であるカスタ構造(estructura de casta)から原住民を解放し、より近代的・資本主義的な階級構造のなかにプロレタリアートとして統合するという路線であった⁽⁴⁹⁾。

ベルトランの批判は、批判的人類学者、ついで社会参与的人類学者(antropólogo comprometido)、そしてネオ・カルデニスモ的潮流と、矢継ぎばやに展開されたが、その論争は一部を除いてスコラ的なものに終始した。

主として批判的人類学者のなかからあらわれてきた原住民集団の文化的独自性とその自決権を主張する潮流＝「民族派」(etnista)に対する批判において、ベルトランはマルクスの社会発展図式をもちだした。バルバドス宣言Ⅰ・Ⅱ⁽⁵⁰⁾に参加したりエスノサイド批判を展開する連中は、人類の歴史が民族斗争ではなく階級斗争によって進展してきたことを理解していないと批判する⁽⁵¹⁾。

「民族派」の理論的支柱となりうる国内植民地論や少数民族論に対する批判を、ベルトランは、1930年代前後にラテンアメリカに一義的に適用されたスターリン流少数民族論への批判者をもちだして展開した。ペルーのマリアテキ⁽⁵²⁾とならんでベルトランがもちだしたのが、メキシコの人類学者メンディサバル⁽⁵³⁾(Miguel Othón de Mendizábal)である。メンディサバルはソ連の少数民族政策に理解を示しながら、歴史の異なるメキシコにおいては、孤立(aislamiento)状況にある抑圧された原住民族集団を、少数民族(pequeña nacionalidad)と認定することより、その内的組織を強化する必要性を強調した⁽⁵⁴⁾。ベルトランがメンディサバルを官製インディヘニスモの「プロレタリア化」路線の確立者として祭りあげたのに対し、メディナ(Andrés Medina)やラガルデ(Marcela

Lagarde)らマルクス主義的潮流は、メンディサバルを社会的変革に実践的に関与する人類学の先駆者として復権させようとした⁽⁵⁵⁾。後者に対するベルトランの対応は、スコラ的なものであり、論争は不毛なものになった⁽⁵⁶⁾。

INI長官としてのベルトランの最後の反論は、チャバス以来の僚友であった古参インディヘニスタのリカルド・ポサスに対するものとなった。ポサスは1976年 *Cuadernos para Trabajadores* 誌の創刊号に、INIの活動事業とその背景にある理論に対する批判を発表した⁽⁵⁷⁾。ポサスは理論と実践の一体化を強調し、インディヘニスモ事業は、インディオ自身による社会関係の分析を基盤とし、土地の返還、生産基盤強化、流通機構の民主化などを推進し、原住民共同体の存立基盤を強固にするものでなければならないと指摘した。教師や文化促進員として働いている原住民が、新しいカシケや原住民ブルジョアと転化していくようなINIの活動方針は打棄し、原住民自身の手で原住民の孤立性に終止符をつけるという方向をめざすべきであると強調した。そして、センターをラディノの居住する地域中心(metropolis)でなく、原住民居住域に設置するべきであるという提案をおこなった。

ポサスの論文に対するベルトランの対応は、各センター長への私信という形をとった。その批判は、6章からなるサポス論文の第1章人類学方法論の部分に限定され、インディヘニスモ政策に関する議論は回避された。そして、ポサスの主張は、1930年代の農村学校教師時代に実施されたデュエイ流の経験主義と安ばいマルクス主義を装った無政府主義的教育にほかならない「社会主義教育」のなかで形成されたもので、ポサスの頭の混乱にほかならないと揶揄した⁽⁵⁸⁾。

現実主義的政治家でもあるベルトランと、新しいインディヘニスモあるいは人類学を模索する人々との論争は、新しい展望を具体的に提起するものではなかったが、ポルティエーヨ政権の標榜するネオ・インディヘニスモの登場を演出する点では一定の役割を果たしたといえる。

現在の論争は、ベルトランがカスタからクラスという定式で示した、搾取されている原住民・農民の「プロレタリア化」という路線のもつ陥穽⁽⁵⁹⁾をどのように切り抜けるかという点をめぐって、マルクス主義的潮流と「ポプリスモ」と命名された潮流との間で展開している⁽⁶⁰⁾。後者は、ネオ・インディヘニス

モを担う一翼を構成しており、諸種の計画実施に携わっており、社会変化のダイナミクスと連繫した人類学(*antropología societaria*)の必要性を強調するものもある⁽⁶¹⁾。かれらの提起する計画は、国家に種々の義務を課すことを前提としており、マルクス主義的潮流から、その国家崇拜主義(*estadolatria*)を指摘されている⁽⁶²⁾。この点に現在のネオ・インディヘニスモの限界性が凝縮していることは明白である。

IV インディヘニスモと原住民運動

前章まで紹介したのは、官製インディヘニスモの動向であるが、それが決して原住民族集団の民族的復権を意味するものでなかったことは明白である。事実としての民族的多元主義は是認されながらも、それが将来の社会モデルとして設定されることはない。原住民の統合を究極目標とするインディヘニスモの専門家として、メキシコ革命以来、指定されてきた人類学者たち以外にも、別種のインディヘニスタは存在する。その代表格は、教会および宗教関係者であろう。本章では、インディヘニスモに関与してきた各セクターの動向と、常にその対象となってきた原住民族集団の対応と独自の運動について紹介する。

1 学界・政界

インディヘニスモをめぐる論争を担ったのは、原住民と国家の媒介者であることを指定された人類学者と、国家モデルの提示者たちであった。1968年にENAHが官製インディヘニスモとの絶縁を宣言して以降、国家はインディヘニスタの養成機関を増し、専門家の序列化を推進していく⁽⁶³⁾。官製インディヘニスモに批判的であり、新しい人類学を模索しようとする潮流は、1975年に *Nueva Antropología* 誌、1979年には *Antropología y Marxismo* 誌などを創刊し、絶えず論争を展開してきた。

しかし、その論争は学界全体を巻きこんだものではなく、1950年代に創設されたメキシコ人類学者専門職協会(*Asociación Mexicana de Antropólogos Profesionales*)に所属する潮流の大部分は、消極的な対応しか示していない⁽⁶⁴⁾。これに対し、民族学者・社会人類学者協会(*Colegio de Etnólogos y Antropólogos Sociales*)は、1970年代前半に結成され、積極的な対応を示している。メキシコ各地での農民虐殺への抗議、メキシコ国内でのILVの活動禁止キャン

ペーンだけでなく、新しいインディヘニスモ政策に関する討論会なども組織してきている⁽⁶⁵⁾。

これら批判的潮流の内部で展開された論争は、「社会的責務(compromiso)」という言葉を乱発したアカデミズム内でのレトリックの交換の域を脱していない。同様のことは、政党レベルでの原住民問題あるいは民族問題(cuestión etnica)をめぐる対応においても指摘できる。

PRI(制度的革命党)の政策=官製インディヘニスモにかわる対策を保有している政党はみあたらない。ポルティョ期の政治改革で国会に議席を確保した政党のうち、PDM(メキシコ民主党)、PAN(国民行動党)、PARM(メキシコ真正革命党)、PPS(人民社会党)は、まったく関心を払っていないといつてよい⁽⁶⁶⁾。一般に左派の政党、労働運動において、原住民あるいは抑圧された少数民族に対する関心は低かったことは、かれら自身も認めている⁽⁶⁷⁾。

唯一の原住民議員を有する共産党は、原住民というタームを避け、民族集団(grupos étnicos)の政治的・民主的諸権利の復権を第一課題とする。その民族集団に関する定義や、具体的プログラムは、ソ連の少数民族政策に準拠したものと見える。メキシコが多民族国民国家(estado nacional multiétnico)であることを認め、民族集団の自治権を認めるために既存の行政界を変更することや、各行政レベル(市・州・国)で民族集団の人口比に応じた代議員定数枠を設定することを唱えている。また当面の要求として、諸々のエスノサイド的行為(開発計画、スペイン語化、不妊化、無償労働などの強制)や、それらを推進する国外諸機関の退去が掲げられている⁽⁶⁸⁾。しかし、共産党の活動が原住民居住域でどの程度支持を受けているかは、不明である。共産党に比較すれば理論的一貫性を欠くものの、原住民労働者の組織化を精力的におこなっているのはPST(労働者社会党)であり、さらには学生活動家の中核となって形成されたPRT(労働者革命党)も農村部での活動をおこなっているという。

2 教会・聖職者

異教徒たる原住民へのキリスト教化活動がエスノサイドであるという視点から批判されたのは1960年代末からである。世界教会審議会の後援で1971年に開催されたバルバドス会議でも、植民地主義的イデオロギーに他ならぬエスノセントリズム的な教化活動が批判されている。1974年のラス・カサス生誕500

周年にあたっては、チアパス州サンクリストバル・デ・ラス・カサスの司教らが中心となり、第1回チアパス州原住民会議を組織化する一方で、原住民聖職者たちも全国センター(Centro Nacional Pastoral Indígena)を組織化し⁽⁶⁹⁾、エスノサイドにつながるぬ途を模索しようとしている。

ローマ法王来墨を契機にプエブラで開催されたラテンアメリカ司教審議会(CELAM)の第3回会議の答申において、原住民の直面している諸問題への考慮が払われなかった点⁽⁷⁰⁾に批判的な部分は、「原住民動員と解放の神学」という討論会を呼びかけた。会議は、1979年9月サンクリストバル・デ・ラス・カサスで開催され、メキシコ、エクアドル、ブラジルの司教や聖職者、ペルー、エクアドル、エルサルバドル、グアテマラ、メキシコの原住民、および数名の人類学者・社会学者が参加した⁽⁷¹⁾。そこでは貧しき人々のなかから自生的に創られる教会(Iglesia autóctona)の必要性が強調された。

これに対し、つとに批判の対象となっているのが、新教ファンダメンタル派のひとつ南部バプティスト教団の設立したワイクリフ聖書翻訳運動 Wycliff Bible Translator と ILV の活動である。ILV の創始者タウンゼント(William Cameron Townsend)は、カルデナスの後楯で、1934年以降メキシコをその活動基地とし、密林地域での活動訓練センターを設置した。メキシコ国内で ILV は1980年までに異なる言語方言をもつ約160の集団と接触し、200以上の拠点で活動しているという⁽⁷²⁾。その活動は、原住民居住域に内的分断と対立をもちこみ、帝国主義の国内への侵透の尖兵であるという批判を受け続けている⁽⁷³⁾。これらの批判の高揚により⁽⁷⁴⁾、公教育省は ILV との協定を破棄し、原住民教育の教材編集(原住民使用言語のテキスト)などの公的活動の場から ILV は排除された。

3 原住民運動の動向

1975年10月の第1回全国原住民会議を契機に組織化された CNPI は、その組織化の経緯や⁽⁷⁵⁾、その後の活動状況をみるかぎり、全国農民連合という PRI 支配機構の一セクターの下部機構として、原住民の不満を吸収する御用機関と墮する危険性を孕んでいる。過去3回の全国原住民会議の決議文には、権力への請願という受動的姿勢と対をなす形で、政府の唱える「生産のための同盟(Alianza para la producción)」への参加がはっきりと表明されている。また、

1979年から発足した民族言語学専門家養成計画も、原住民のなかから新たな開明的カシケ(cacique ilustrado)と専門技術者を養成するための選別的政策にほかならないとする批判もある。

この批判は、ワステカ地方の原住民教師・文化促進員らによって結成されたナワ原住民専門職組織(Organización de Profesionistas Indígenas Nahuas)から発展的に誕生した全国原住民二重言語専門職業人連盟(Alianza Nacional de Profesionales Indígenas Bilingües, ANPIBAC)の活動⁽⁷⁶⁾の評価と、その可能性を検討する場合にも考慮しなければならない。かれら知的エリートは、全国原住民会議の組織化の実際的な担い手であり、様々の会議宣言文の原案作成者でもある。かれらは「原住民なきインディヘニスモ」を推進してきたINIの活動を批判し、依然として「参加の政治」というスローガンを正当化するためのものとしてのみ原住民共同体を操作している政府の新政策の偽瞞性を指摘している⁽⁷⁷⁾。

CNPIの組織化、ANPIBACの誕生をもって、原住民は初めて自らの声で、収奪と抑圧について語り批判することを始めたという評価は避けねばならない。メキシコの古文書館などに、かれらの460年以上にわたる抑圧との闘いが、数多く記録として残っている。土地をめぐる農民・原住民の闘争は、メキシコのすみずみで展開している。ゲレロ州の高地部⁽⁷⁸⁾、ベラクルス・イダルゴ・サンルイスポトシ州にまたがるワステカ地方⁽⁷⁹⁾、テワンテペク地峡部⁽⁸⁰⁾、ミチョアカン州のタラスコ高原などの原住民族集団・農民は、極めて激しい土地闘争を展開し⁽⁸¹⁾、その一部はアヤラ綱領全国調整委員会(Coordinadora Nacional Plan de Ayala, CNPA)に結集しているという。これらの運動とCNPIを有機的に結合する軸は、現在のところ不在である。

70年代のネオ・インディヘニスモの成果は、原住民というメキシコ人口の1割強を占めるセクターにCNPIという協調的組織を指定したことにあり、この評価は政治主義的偏向になるのであろうか。

注

- (1) この見解は、Arturo Warman, “Indios y naciones del indigenismo”, *Nexos*, 2(1978), pp. 3-8を要約したものである。同様のものとして Bonfil Batalla, “El concepto del

indio en América: una categoría de la situación colonial”, *Anales de Antropología*, vol. IX, (1972), pp. 105-124,あるいは高山智博「メキシコ・ナショナリズムと土着民間題」(増田義郎編『ラテンアメリカのナショナリズム』アジア経済研究所, 1977年)35-58頁を参照した。

- (2) Aguirre Beltrán, G., “Un postulado de política indigenista”, en *Obra polémica* (México, SEP-INAH, 1976) pp. 21-28. Enrique Florescano, “El indígena en la historia de México”, *Historia y Sociedad*. 2a época, 15(1977). pp. 70-89.
- (3) Guillermo Bonfil, “Del indigenismo de la revolución a la antropología crítica”, en *De eso que llaman Antropología Mexicana*, Arturo Warman et al. (México, Edit. Nuestro Tiempo, 1970) pp. 39-65. Aguirre Beltrán, “Encuentro sobre indigenismo en México”, en *op. cit.* pp. 63-79.
- (4) Javier Guerrero, F., “La cuestión indígena y el indigenismo”, en *Indigenismo, modernización y marginalidad, una revisión crítica*, Héctor Díaz-Polanco et al. (México, CIIS-Juan Pablos Editor, 1979) pp. 47-81.
- (5) Alfonso Caso, “Un experimento de antropología social en México”, en *INI, 30 años después, revisión crítica* (México, INI, 1978) pp. 82-86. シンポジウムの席上で高山氏も1962年のメキシコ市でのアメリカニスト会議でのカソの同趣の発言を紹介された。
- (6) Félix Báez-Jorge, “Aculturación e integración intercultural: un momento histórico del indigenismo mexicano”, en *INI, 30 años después*, pp. 290-299.
- (7) 自主管理の概念については Adolfo Colombres, “Hacia la autogestión indígena”, en *7 ensayos sobre indigenismo*, Nahmad Sitton. et. al. (México, INI, 1977) pp. 29-49, および Andrés Serbín, “La autogestión desde la perspectiva antropológica: modelo y realidades”, en *Indigenismo y autogestión*, eds. Andrés Serbín y Omar González (Caracas, Monte Avila Editores, 1980), pp. 193-206.
- (8) Ignacio Ovalle Fernández, “Bases programáticas de la política indigenista (un esquema participativo)”, en *INI, 30 años después*, pp. 9-21.
- (9) Salmón Nahmad, “Perspectivas y proyección de la antropología aplicada en México”, *Nueva Antropología*, 9(1978) pp. 103-107.
- (10) Demetrio Sodi M., “Algunas ideas de Alfonso Caso”, en *INI 30 años después*, pp. 195-198.
- (11) 臨時予算を含めると, 1971年の3910万ペソが1976年には4億6600万ペソと, 約12倍増であり, 同期間のインフレ率300%を考慮しても実質4倍増となる。
- (12) 本予算の33%が管理行政費, 教育事業28%, 農牧業振興20%, 衛生事業9%となっている。
- (13) Ruth Arboleyda y Luis Vásquez, *En torno a la crisis de la antropología nacional y su superación* (México, SEP-INAH, 1979) p. 5.
- (14) この点については, 松久玲子「メキシコにおける二重言語・文化教育の動向」(『京

- 都大学教育学部紀要』XXVIII, 1982)301-311 頁参照。
- (15) Rodolfo Stavenhagen, “La cultura popular y la creación intelectual”, mimeo 1979. p. 27 山崎春成他訳『開発と農民社会』(岩波書店, 1981)144 頁。
- (16) この間の事情は, Shirley Brice Heath, *Telling Tongues: Language Policy in Mexico, Colony to Nation*, (New York, Teachers College Press, 1972)pp. 157-160 に詳しい。
- (17) Aguirre Beltrán, *El proceso de aculturación* (México, UNAM, 1957), do., *Regiones de refugio* (México, III, 1967) など参照。
- (18) Aguirre Beltrán, “Informe ante el presidente de la República”, en *Obra polémica*, pp. 161-172. および Aguirre Beltrán, Villa Rojas, Romano D. y otros, *El indigenismo en acción* (México, INI, 1976) pp. 263-64.
- (19) この経緯は, Mercedes Olivera, “La escuela de desarrollo regional”, en *INI 30 años después*, pp. 245-253 および Reynaldo Salvatierra C. “Realización de “una aventura del pensamiento””, en *El indigenismo en acción*, pp. 94-103 に詳しい。
- (20) Félix Báez-Jorge, “Reflexiones sobre el quehacer de la antropología en México”, *América Indígena*, vol XL No. 2(1980), pp. 367-380.
- (21) Lourdes Arizpe, “El primer congreso nacional de pueblos indígenas”, en *El reto del pluralismo cultural* (México, INI, 1978) pp. 59-64. Andrés Medina, “Los indios”, en *7 ensayos sobre indigenismo*, pp. 19-27. Félix Báez-Jorge, “Indigenismo e impugnación” en *ibid.* pp. 51-71 など参照。
- (22) CNPI はメキシコ市に本拠をおき, 各原住民集団ごとの評議会の代表者たちによる審議会, 13名の代議員と13名の副代議員で構成される常任委員会からなる。
- (23) COPLAMAR には, INI, 乾燥地域全国委員会 (Comisión Nacional de Zonas Áridas), メスキタル谷原住民資源委員会 (Patrimonio Indígena del Valle del Mezquital) など 11 の機関が参加している。
- (24) Comisión Permanente del CNPI, “Programa de acción para el desarrollo social y económico de los pueblos indígenas de México”, en *INI, 30 años después*, pp. 369-381.
- (25) Ignacio Ovalle, *op. cit.*
- (26) Marina Anguiano, “La etnología como factor de reforzamiento de la identidad étnica”, *América Indígena*, vol. XXXIX. No. 3(1979), pp. 573-586. なお民衆文化総局の発足に積極的に携わったのは, スタベンハーゲンであり初代局長を勤めた。一方, 計画はアカユカン(1978), チコンテペック(1979), パパントラ, アカユカン, パックアロ, バジャドリド(1980)のセンターで, 実施されている。計画の詳細は, Laura Collin y Félix Báez-Jorge, “El patrimonio cultural de los grupos étnicos: ¿Nativismo o conciencia para sí?”, *América Indígena*, vol. XXXIX No. 3(1979)pp. 587-599 を参照。
- (27) Guillermo Bonfil, “Programa de formación profesional de etnolingüistas”, en *Indigenismo y lingüística* (México, UNAM, 1980)pp. 61-81.
- (28) 公教育省と夏期言語研究所の協定は1951年に締結され, 1990年まで2ヘクタール

の本部建物用地が無償提供されている。

- (29) 前 INI 長官アグレ・ペルトランも同様の見解を展開している。Aguirre Beltrán, “Otra vez los indios”, *Nexos* 48(1981)pp. 45-49.
- (30) この動向については, Gerrit Huizer, “Anthropology and Politics : From Naiveté Toward Liberation?”, in *The Politics of Anthropology*, eds. Gerrit Huizer & Bruce Mannheim(The Hague, Mouton, 1979)pp. 3-41 を参照。
- (31) メキシコからはダニエル・カセスが参加し, フランクも急進的コメントを展開している。“Social Responsibilities Symposium”, *Current Anthropology*, vol. 9. No. 5(1968), pp. 391-435.
- (32) Fals Borda, Orlando. *Ciencia propia y colonialismo intelectual* (México, Editorial Nuestro Tiempo, 1970)pp. 25-31.
- (33) メキシコからは, Miguel Alberto Bartolomé, Guillermo Bonfil Batalla が参加している。“The Declaration of Barbados : For the Liberation of the Indians”, *Current Anthropology*, vol. 14, No. 3. (1973)pp. 267-270.
- (34) Stavenhagen, Rodolfo “Decolonializing Applied Social Sciences”, *Human Organization*, vol. 30. No. 4(1971)pp. 333-357 山崎春成他訳『開発と農民社会』278-316 頁。
- (35) 約 300 名の学生のうち 50 人程が積極的に参加していたという。Federico Campbell, “El indigenismo necesita una nueva teoría y, sobre ella, reelaborar una nueva praxis : Andrés Fabregas”, en *INI, 30 años después*, pp. 131-138.
- (36) Arturo Warman et. al. *De eso que llaman Antropología Mexicana* (México, Editorial Nuestro Tiempo, 1970)157 pp.
- (37) Arturo Warman, “Todos santos y todos difuntos, crítica histórica de la antropología mexicana”, en *ibid.*, pp. 9-38.
- (38) Guillermo Bonfil, “Del indigenismo de la revolución a la antropología crítica”, en *ibid.* pp. 39-65.
- (39) この研究所は, エチェベリア期の公教育省大臣 Víctor Bravo Ahuja がオアハカ州知事であった 1969 年に設立したもので, その夫人で言語学者の Gloria Bravo Ahuja が所長をつとめていた。
- (40) Margarita Nolasco, “La antropología aplicada en México y su destino final : el indigenismo”, en *ibid.* pp. 66-93.
- (41) Mercedes Olivera, “Algunos problemas de la investigación antropológica actual”, en *ibid.* pp. 94-118.
- (42) Enrique Valencia, “La formación de nuevos antropólogos” en *ibid.* pp. 119-153.
- (43) Ángel Palerm, “Indigenismo en México : confrontación de problemas”, *Anuario Indigenista*, XXX(1970), pp. 295-306.
- (44) Ricardo Pozas y Isabel H. de Pozas, *Los indios en las clases sociales de México*, (México, Siglo XXI, 1971)

- (45) Stavenhagen, “Decolonizing Applied Social Sciences”.
- (46) この審議会の内容は、*¿Ha fracasado el indigenismo? Reportaje de una controversia* (13 de septiembre de 1971) (México, Sep-Setentas, 1971) に所収。
- (47) かれには、*Los indios de México*, 5 tomos (México, Era 1967-81), *Lázaro Cárdenas y las revoluciones mexicana*, 3 tomos (México, Fondo de Cultura Económica, 1977-78) という著作がある。
- (48) 非常に図式的であるが、Monzón Estrada, Arturo, “Las ventajas de actualizar el indigenismo”, en *INI, 30 años después*, pp. 286-89 が参考になる。
- (49) Aguirre Beltrán, “Encuentro sobre indigenismo en México”, en *Obra polémica*, pp. 63-79. “De eso que llaman antropología mexicana”. *ibid.*, pp. 98-117, “Los símbolos étnicos de la identidad nacional”, *ibid.*, pp. 118-60, “El indigenismo y la antropología comprometida”, *ibid.*, pp. 177-212.
- (50) 拙稿「アメリカ大陸の原住民運動—バルバドス第2宣言をめぐる—」神戸大論叢 32-5(1981), pp. 61-76.
- (51) Aguirre Beltrán, “Etnocidio en México: una denuncia irresponsable”, en *Obra polémica*, pp. 213-27. “Otra vez los indios”
- (52) Aguirre Beltrán, “Introducción” en Lombardo Teledano, *El problema del indio* (México, Sep-Setentas, 1973), pp. 7-49.
- (53) メンディサバルは、カルデナス期に創設された原住民総務自治課 (Depto. Autónomo de Asuntos Indígenas) の顧問、労働者大学学長を勤め、ENAH の創設を推進している。かれの人類学者としての貢献については、Andrés Medina, “Teoría antropológica y trabajo de campo en la obra de Miguel Othón de Mendizábal”, en *La investigación social de campo en México*, ed. Martínez Ríos, J., (México, UNAM, 1976), pp. 217-57 参照。
- (54) Miguel Othón de Mendizábal, “La etnología”, en *Obras completas* (México, 1947) t. IV, pp. 141-153. “El Departamento Autónomo Indígena de México, sus fines, su táctica, y su organización”, en *ibid.*, t. IV, pp. 331-38. “El problema de las nacionalidades oprimidas y su resolución en la U. R. S. S”, en *ibid.*, t. IV, pp. 389-99.
- (55) Andrés Medina, “¿Etnología o literatura? El caso de Benítez y sus indios”, *Anales de Antropología* XI. (1974) pp. 109-140. Marcela Lagarde, “El concepto histórico de indio. Algunos de sus cambios”, *ibid.*, pp. 215-224.
- (56) メンディサバルはPCM 党員であったか、マルクス主義理論の適用の正誤、インディヘニスマは応用人類学かなどについての揚げ足とりのものに終始している。
- (57) Ricardo Pozas, *La antropología y la burocracia indigenista* (México. Ed. Tlacuilo, 1976).
- (58) Ruth Arboleyda y Luis Vazquez, *En torno a la crisis*. p. 38.
- (59) 経済主義的 (economicista) な階級理論、発展段階論にもとづく左右の統合主義が提

起する路線は、国民国家についての権威主義的・中央集権的モデルを前提としており、「民族か階級か」あるいは「二段階革命論」をめぐる非生産的な議論を喚起する宿命をもつと思われる。Stavenhagen, R, “Clase, etnia y comunidad”, en *INI, 30 años después*, pp. 97-100. Stefano Varese, “Una dialéctica negada: notas sobre la multiethnicidad mexicana”, en *En torno a la cultura nacional*, Héctor Aguilar Camín et al. (México, INI, 1976) pp. 135-158. José Lameiras, “Antropología, política e indigenismo, a propósito de 7 ensayos sobre indigenismo”, *Nueva Antropología*, 9(1978) pp. 67-77.

- (60) Héctor Díaz-Polanco, “Indigenismo, populismo y marxismo”, *Nueva Antropología*, 9(1978) pp. 7-31. “La teoría indigenista y la integración” en *Indigenismo, modernización y...* pp. 9-45.
- (61) Felix Báez-Jorge, “Reflexion sobre...” pp. 374-76.
- (62) Héctor Díaz-Polanco, “Indigenismo, populismo...” pp. 22-23.
- (63) 1969年に当時オアハカ州知事(エチェベリア期公教育省大臣)の肝入で創設されたIISEO(1976年以降は社会統合調査センター Centro de las Investigaciones para la Integración Socialの発足で機能低下)は、1974年まで約500人の原住民インディヘニスタを養成している。またINAHには高等研究センター(Centro de Investigaciones Superiores del INAH)が付置され、初代センター長にはアンヘル・パレルム、ついでギジェルモ・ボンフィルと、官製インディヘニスモに批判的であった人類学者が登用されている。
- (64) Andrés Medina, “Ortodoxia y hereja en la antropología mexicana”, *Anales de Antropología*, vol. XIII(1976), pp. 217-232.
- (65) “Ideología y política en Antropología: El caso del ILV en México”, *América Indígena*, vol. XLI(1981) pp. 554-561.
- (66) Lourdes Arizpe, “Los indígenas: El retorno imposible”, *Nexos*, 25(1980) pp. 35-39.
- (67) Jaime González, “La triple opresión de las minorías indígenas”, *Nueva Antropología*, 9(1978) pp. 97-102.
- (68) Javier Guerrero, Marcela Lagarde, María Elena Morales, PCM, “La cuestión étnica”, *Nueva Antropología*, 9(1978) pp. 79-93.
- (69) *Estudios Indígenas* という研究・広報誌が発行されている。
- (70) Serén Bernabé, Isidoro Tehuintle, Eleazar López, “Los sacerdotes indígenas: Documento para el CELAM III”, *Nueva Antropología*, 9(1978) pp. 108-115.
- (71) “La cuestión indígena y la teología de la liberación”, *Nueva Antropología*, 13-14(1980), pp. 275-295.
- (72) ILVの概要はALAI “El Instituto Lingüístico de Verano, instrumento del imperialismo”, *Nueva Antropología*, 9(1978), pp. 116-142.
- (73) *ibid.*, Margarita Nolasco, “El Instituto Lingüístico de Verano en México”, en *Indigenismo y lingüística*, pp. 145-151. Andrés Fábregas, “El Instituto Lingüístico de Verano

- y la penetración ideológica”, en *ibid.*, pp. 153-158. Marcela Lagarde y Daniel Cazés, “Política del lenguaje y lingüística aplicada: Del segmento fonético al ejército”, en *ibid.*, pp. 159-169. “Ideología y política en Antropología…”
- (74) これらの批判に対し、学問的貢献を評価する立場からの弁護論として、Aguirre Beltrán, “El Instituto Lingüístico de Verano”, *América Indígena*, vol. XLI(1981), pp. 435-461 参照.
- (75) 拙稿「アメリカ大陸の原住民運動」71-75頁参照.
- (76) ANPIBAC の活動目標に関しては, “Declaración de principios y programa de acción de la ANPIBAC”, en *Utopía y Revolución*, Guillermo Bonfil comp. (México, Nueva Imagen, 1981), pp. 395-398. “Declaración de Oaxtepec”, en *ibid.*, pp. 400-403.
- (77) Natalio Hernández, “La nueva política indígena”, en *INI, 30 años después*, pp. 167-68. Franco Gabriel Hernández, “Lengua nacional vs lenguas indígenas”, *América Indígena*, vol. XXXIX (1979), pp. 563-571.
- (78) ここでは Consejo de Pueblos de la Montaña という組織が形成されている.
- (79) “Manifiesto de los Pueblos Unidos de las Huastecas”, en *Utopía y Revolución*, pp. 403-410.
- (80) この地域で結成された地峡部労働者・農民・学生同盟(Coalición Obrera Campesina Estudiantil del Itsmo, COCEI)は、フチタン市長選で、PCM と共闘し勝利した経験をもち注目される.
- (81) これらの斗争に対する弾圧については、アムネスティ・インターナショナル・ラテンアメリカ研究会誌『エル・クラベル』5号(1982)に一部紹介されている.